

16 | 手背部腫痛

《1方》

【主治】手背の発赤腫脹と痛み

【取穴】八邪穴（図26）

【位置】手の5指の縫合間、左右合わせて8穴ある。

【操作】手を軽く握り、毫針を用いて、掌側骨間に向けて斜刺で0.3～0.5寸。瀉法で20分置針する。その間、2～3回提挿捻転する。毎日あるいは2日に1回治療する。

【考察】経外奇穴である。八邪穴は手全体の気血のめぐりをよくし、その他に手指の痺れ感・痛みにも効果がある。

西田コメント

手法は点刺して出血させてもよい。

《2方》

【主治】手背の発赤腫脹と痛み

【取穴】外勞宮（図F）

【位置】手背の第3中手骨尺骨側にあり、腕背横紋中点と第3中手骨小頭をつなぐ線の中点の陥凹部。

【操作】毫針を用い、直刺で0.5寸。提挿して針感が強まるのを待って20分置針。毎日あるいは2日に1回治療する。

【考察】経外奇穴である。

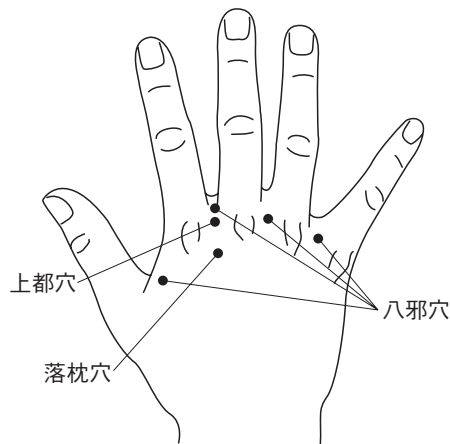


図26 八邪穴の位置

西田コメント

経脈としては三焦経の循行上にあり、上焦・中焦・下焦の気血をめぐらせることにより、結果的には手の異常にも効果があると思われる。当然、近位効果も期待できる。

17 | 手指痙攣

《1方》

【主治】手指痙攣

【取穴】中泉（経外奇穴・図E）

【位置】腕背側の陽池と陽谿との中間の陷中部。

【操作】毫針を用い、直刺で0.3寸。

【考察】中泉は経外奇穴である。その作用機序は、1つは経験による取穴であり、もう1つは局所の近位取穴である。近位穴は局所の病気を治すことができる。

西田コメント

陽池（三焦経）は手根背側の横紋中で指伸筋腱の尺骨側の陥凹中にある。陽谿（大腸経）は舟状骨と橈骨の間で、短母指伸筋腱と長母指伸筋腱の間にある。

《2方》

【主治】十指の痙攣

【取穴】支正（図27）

【位置】陽谷と小海（小腸経）との線上で、陽谷から上5寸のところ。尺骨の外側。

【操作】毫針を用い、直刺で0.5～0.8寸。平補平瀉法で、20分置針。毎日1回刺針する。

【考察】支正は手太陽小腸経の絡穴である。小腸経は支正から絡脈の分枝が出て心経に連絡しているので、精神的興奮も安定させる働きがある。

《3方》

【主治】五指拘攣

【取穴】五虎穴（図28）

【位置】手背で、第2・4中手骨頭の先端。手を握って取穴する。左右合わせて4穴。

【操作】毫針を用い、直刺で0.1～0.2寸。20分置針、毎日1回刺針する。

【考察】経外奇穴である。奇穴は専属の病気を治す傾向がある。また近位穴はその近くの病気を治療するので、手指の拘縮にも効果がある。

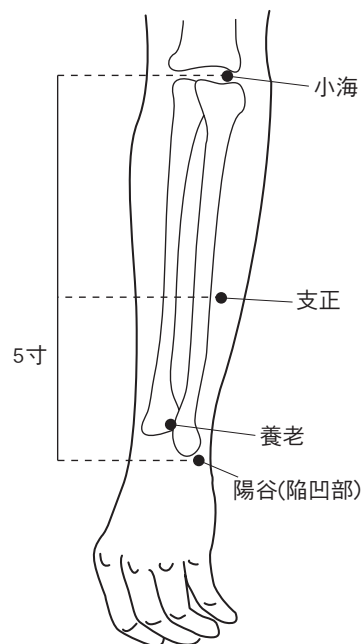


図27 支正の位置

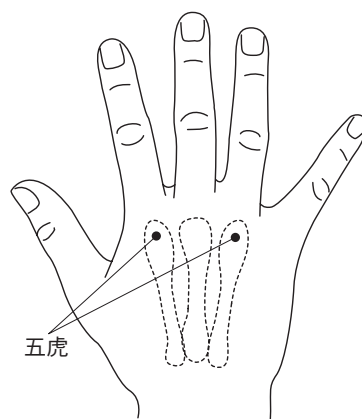


図28 五虎穴の位置

《1方》西田追加方

【主治】腰筋労損

【取穴】痞根（経外奇穴・図C）

【位置】第1・2腰椎棘突起の両側3.5寸で、指圧するとひときわ圧痛硬結が強いところ（痞塊圧痛点）、「痞の塊」がある。ここに取穴する。

【操作】伏臥位で痞根穴に取穴し、長針（2寸）の毫針で、脊柱に向けて45度ほどの角度で深く刺入する。得気を得た後、捻針すると腰部、さらに下方の大腿、膝に響きを得る。その上に灸頭針を施行して痞根周辺が発赤すると、温通することにより痞塊が溶けるのでよい効果が得られる。刺針だけの場合は20～30分置針する。

【考察】本穴は、痞根周辺の機能が阻閉したために起こった不快感や脹満感（この状態を中医学では「痞」という）を主治する。

西田コメント

痞には「胸・腹にかたまりのようなものがつかえる、つまる」の意味がある。この痞の根本的な根元になっているところであるので、この穴名がある。

本穴は古来より頻用されてきたようで、臨床的には応用範囲は広く、内臓の異常にも、また膀胱経の傍らにあるために近位効果として腰背痛にも効果がある。

痞根穴は専ら、痞塊を治す。したがって本穴の主な効果は、気をめぐらせることによって痞を消失させる（行気消痞）。痞を治すこ

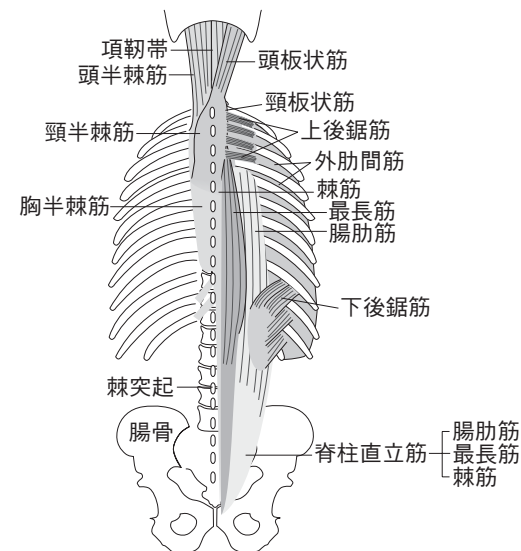


図29 深部の背筋

とによって胃部の脹満や不快感、痞塊がなかなか治らない者を治すことができる。現代医学でいう、肝炎・胃炎・腎下垂などの疾患で、このような症状があるときにも用いられる。

《2方》西田追加方

【主治】腰筋労損

【取穴】腎俞（図C）

【位置】両側の第2腰椎の棘突起の下で、督脈の命門の両側1.5寸。

【操作】皮内針、または刺針する。毫針を用いる場合は直刺で1～1.5寸。皮内針は1週間ほど埋針してもよい。

【考察】腎俞は足太陽膀胱経の腧穴である。その走行上には五臓六腑の腧穴があり、ほかの十二経脈に比べて膀胱経は臓腑と密接に関連している。腎は先天の本であり、精気を蓄え生殖・発育の働きもあるので、腎俞は強壯の経穴でもある。

腰筋労損は疲労により腰部筋肉が受傷し、あるいは風寒湿の邪を感受したため、経絡は阻滯し、気血の運行障害に陥り、また慢性疾患のために精血がなくなるために生じる。腎俞を刺激することによって、補腎・益精・腰背の強壯を強め、また腰部の気血の疏通をよくするので、「通ずればすなわち痛まず」になり、腰背部の痛みや鈍痛も止めることができる。

《3方》西田追加方

【主治】腰筋労損

【取穴】阿是穴

【位置】多くの場合、患者は腰背部の筋肉上に阿是穴を指摘する。阿是穴は夾脊穴や膀胱経上にあることが多い。

【操作】腰背部の経筋病巣（圧痛硬結）に直刺、または皮内針する。

【考察】『靈枢』経筋篇では、「痛をもって輸となす」と指示している。疼痛や

苦痛を感じる部位に異常（気血の阻滯）があるので、この部位に刺針すると閉塞が解消され気血のめぐりがよくなり、苦痛は消失する。

《4方》西田追加方

【主治】腰筋労損

【取穴】腰宜（経外奇穴・図C）

【位置】第4・5腰椎突起の間と同じ高さで、両側の4横指のところに取穴する。足太陽膀胱経の第2行循行上で、大腸俞の外側1.5寸である。ここは腰痛の患者自身が阿是穴としてよく指摘する部位でもある。

【操作】45度内方に斜刺で1.6～2寸。針の響きは、局所はもちろん下方の仙骨部に放散する。

【考察】本法の効果は、腰部の神経痛や重だるい感じ、脊柱筋群の痛みを治す。

《5方》西田追加方

【主治】腰筋労損

【取穴】大腸俞（図C）

【位置】第4腰椎棘突起下の両側1.5寸。本穴の下に、胸腰筋膜・脊柱直立筋（図17〈84頁〉・29）がある。深層には仙骨神経叢がある。

【操作】直刺で1.5寸。捻針すると仙骨や肛門、ときに下肢に響きを生じる。

【考察】大腸俞は膀胱経の腧穴であるので、一針で頸部・背部・腰部全体の筋肉の異常を治すことができる。また病んでいる筋肉に直接刺針することになり、経筋療法でもある。

《6方》西田追加方

【主治】腰筋労損

【取穴】天柱（膀胱経）